

磐田市戦没者・戦災死者追悼式「平和への想い」

平成 22 年 8 月 15 日 市民文化会館

私は、広島平和記念式典派遣団の中学生の一員として、8月5日と6日の2日間、広島を訪れました。

1日目は、平和記念資料館で、当時の様子や原爆による被害について学びました。そこには、原爆が落とされる前と後のジオラマや、焼けこげになった学生服、皮膚がただれ、包帯を何重にも巻かれている人々の写真などが展示されていました。今までは、想像の中や授業の一貫で習った事ではなかった原爆が、一瞬のうちにして人々の生活を壊し、広島をあんなにも真っ黒に染めてしまったことを知って、心の奥が締め付けられたように感じました。原爆が引き起こした多くの被害の資料を、実際に自分自身の目で見ることで、当時の悲劇と向き合うことが出来ました。資料館では、被爆者の方から直接お話を聞くこともできました。全国の、約22万人の人が被爆者健康手帳というものを持っているそうです。手帳をもっていれば、国から様々な支援が受けられますが、昔は手帳を持っているというだけで差別を受けたそうです。それだけでなく、手帳を交付されず、支援を受けられない被爆者の方も大勢いるということをお聞きしました。その被爆者の女性は、強く手を握りしめ、まっすぐに私たちの目を見て、当時の様子を話して下さいました。必至に平和への願いを伝えていたその姿は決して忘れられません。

次に原爆ドームの周辺を見学しました。原爆の子の像の後には、全国から多くの千羽鶴が届けられていました。また、原爆ドームを初めてこの目で見たとき、写真では伝わってこなかった何かが、心に響いてきました。原爆ドームは、核兵器の廃絶と世界の平和を求め、訴えかけているシンボルなのだと感じました。

二日目の平和記念式典には、過去最多の74カ国が出席したことを知り、核兵器や平和に対しての関心が、世界に広がっていることをうれしく思いました。きっと、戦争に反対する人々の強い思いが、世界の人々の心に伝わったのだと思います。記念式典が始まるのを待っている間、金色の折り紙で鶴を折りました。久しぶりに鶴を折っていて感じたのは、私自身が世界のことについて考え、願いを持つようになるなんて想像もしていなかった、ということです。少し前までは、戦争について「戦争はあってはいけない」という当り前の考えしか持っていませんでした。しかし、2日間たくさん経験をしていく中で、戦争によってどのような被害が起こるのか、そしてどんなにたくさん尊い命が失われるのかを、世界の1人1人に考えてみて欲しいと思うようになりました。また、日々の自分の悩みがどんなに小さな事を、こうして平和に暮らせていることがどんなに幸せな事なのかを、気付かせてくれました。

広島から帰ってきて、磐田在住の祖父母にも当時の様子を聞いてみました。祖父は12才・祖母は4才のときの出来事。頭の上を艦砲射撃の球が飛んでいき、浜松が赤く染まっていった様子を今でも鮮明に覚えていて、防空壕にもぐりながら、なぜこんな事をしているのだろうと思っていたそうです。

65年がたった今でもなお、昨日のことにように思い出されるという戦争。ここ磐田市でも、たくさんの方がその戦争の被害に遭われ、尊い命を奪われました。その悲しさ・無念さ、そして戦争に対する怒り・おろかさを私たちの世代が受け継ぎ、平和な未来を築いていかなければいけないと思いました。

私が通っている一中・そして磐田市の代表として得た貴重な体験と、そこで感じたことを学校でも話す機会を設けてもらおうと思っています。今日は、少しでも多くの人にこの思いを伝えたいと思っていた私に、このような場を与えてくださった渡部市長さんに本当に感謝しています。ありがとうございました。

最後に、核兵器も戦争もなく、すべての人々が安心して暮らせる平和な世界を願うと共に、過去の戦争で亡くなられた多くの方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。

磐田第一中学校 3年 渥美 文也奈